PRIME
MEDIA LINE

建築とヒト・コト・モノにまつわる物語

1980年代、PRIMEが設計事務所として始動する前、建築を愛する若者が集うチームだった頃に
PRIMEの活動を届ける紙メディアが「PRIME MEDIA LINE」でした。
今、その媒体が時を越え再始動し、現在のPRIMEを発信していきます。
建物が完成するまでのプロセスや住み手のインタビューなど、建築にまつわる物語を
読みものとしてお伝えしていきます。建築をめぐるストーリーをお楽しみください。

Index

01 「TERRACE＋SPORTS」広場に大きな屋根をかける
テラスポ鶴舞　徳田 康さん

02 木と鉄骨が織りなす、光と共に楽しむ場
鳥取ユニバーサルスポーツセンター ノバリア　PRIME 小谷野直幸さん

03 「美容 × スポーツ」紙飛行機のようなクラブハウス
ちふれ化粧品　飯能研修センター　鈴木 康之さん

04 PRIME / プライム建築都市研究所展「都市 × 建築 × スポーツ」
プリズミックギャラリー

05 我が家のカタチ、固定概念なし。
天王台の家　〇さんご家族

06 こだわり飾る、日々を楽しむ。
我孫子の家　Kさん

07 「木 × 巨大ガラス」究極のコラボレーションの家
東松戸の家　Sさんご夫妻

08 「注文の多い料理家」の家
北品川の家　Tさん

01

「TERRACE+SPORTS」広場に大きな屋根をかける

テラスポ鶴舞

Photo : Nobuaki Nakagawa & Kana Tanabe / Text : Kana Tanabe

テラスポ（TERRASPO）は、テラス（TERRACE）とスポーツ（SPORTS）を組み合わせた言葉。
スポーツで人をつなぎ、新しいコミュニティを生み出していく「市民のテラス空間」

*2018　グッドデザイン賞・ウッドデザイン賞　受賞

Interview

「テラスポ鶴舞」整備の中心人物である愛知県サッカー協会の徳田専務理事にお聞きしました。徳田さんは日本サッカー協会の施設委員長としても、サッカーをはじめとするスポーツ環境の整備を推進されています。

－この施設で目指したことや特徴はなんですか？

サッカーやスポーツをする人・見る人・支える人だけでなく、サッカーやスポーツにあまり興味のない人も、訪れたい、心地いいと感じる施設を目指しました。スポーツを広義で考え、競技に特化した施設ではなく、コミュニティを生み出すことができることを大切にしました。
また、施設を愛知県サッカー協会で整備し、名古屋市に寄付をしました。運営に関しても、市の予算（指定管理費）を受けずに行っていることも大きな特徴です。

－とくに気に入っているところはどこですか？

クラブハウスにテラスやラウンジなど、人の居場所が多くあるところですね。特にラウンジは開放感があり、公園を散歩する人などが気軽に訪れています。
街中の施設として夜間照明付きの人工芝グラウンド２面あることも利用者の幅を広げており、土日はほぼ100％年間を通して70％を超える高い利用率となっています。

－実際にできてから気づいたことはありますか？

クラブハウス中央の屋根のかかったセンターテラスの利用価値が高く、イベントなどに有効に利用されています。また、２つのグラウンドがよく見えるため、選手の家族などが、軒下のテラスでくつろぎながら観戦をしていることも多くみられる風景です。

－印象に残ったイベントなどはありますか？

障がい者と健常者が一緒にサッカーに取り組んだイベント「だれでもサッカー広場」を開催しましたが、サッカーを通じて誰もが一体になる、まさにスポーツの力を感じました。

2018年10月28日(日)
「だれでもサッカー広場フットボールデー2018愛知」
イベント当日の様子（Youtube）

－新型コロナウイルスの感染拡大を経て気づいたことや施設の今後の役割などがあればお聞かせください。

この施設は公園全体が広域避難場所としての役割を担っています。クラブハウスは医務室やマルチルーム、トイレ、シャワーなどが整っており、災害時には避難施設として使われるよう計画しています。大学病院が公園に隣接をしており、災害時（新型コロナ感染拡大も含め）には病院と協力してサテライトとしての役割を担うことができればと考えています。

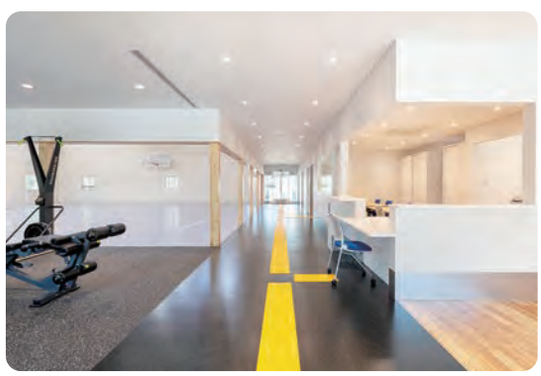
02

木と鉄骨が織りなす、光と共に楽しむ場

鳥取ユニバーサルスポーツセンター　ノバリア

Photo : SATOH PHOTO / Text : Kana Tanabe

体を動かすことを楽しんでいる人々の風景が見える、開かれた体育館。
正方形の空間を活かし、光を取り入れた屋根の構造を実現。



Interview

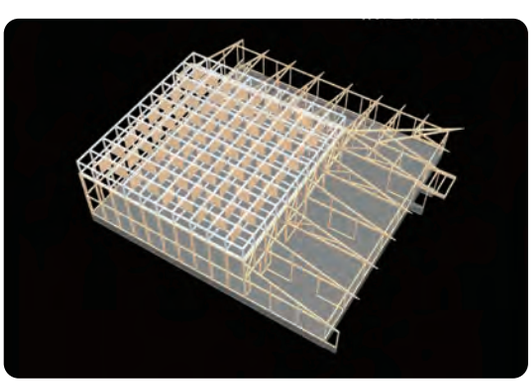
PRIMEの小谷野直幸さんにお聞きしました

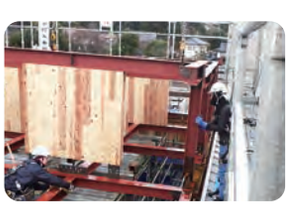
―この施設で目指したものは？

目指したのは、開かれた体育館です。壁に囲われて、重く大きな扉を開けないと中の様子がわからない体育館ではなく、建築に入ると、障がいの有無に関わらず、体を動かすことを楽しんでいる人々の風景が見える体育館を目指しました。先入観が邪魔をすることがあるので、普段は、計画の最初の段階からこれを目指す！ということは少ないのですが、今回は開かれた体育館を目指して、ブレることなくそれを創れたという、我々としては珍しくストレートなプロセスだったと思います。スポーツ広場という名が付きましたが、広場のように開かれた体育館を提案し、その価値や意味を関係者の方々と共有できたことが大きかったと思っています。

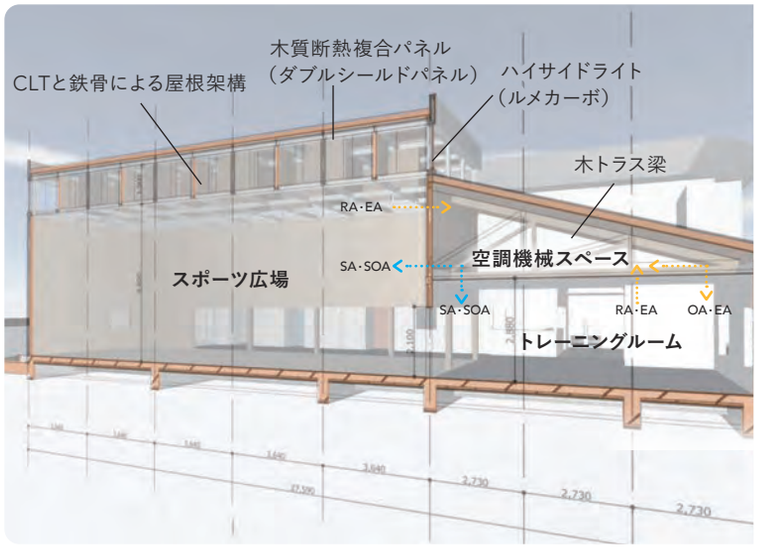
―1番こだわったところは？

体育館としては決して大きくない、バスケットボール半面ほどのスポーツ広場ですが、それでも18m×18m 程度の大空間になります。このスポーツ広場の屋根の構造と光の入れ方が設計としては一番こだわったところです。普通、体育館のような大空間は、長方形をしていることがほとんどで、スパンの短い方向に梁を掛け並べることが多いのですが、今回は正方形の空間なので、正方形でしか出来ない、正方形のメリットを活かせる屋根の構造を構造設計者と一緒に考えました。様々な可能性を検討する中で、大空間をつくるのに適した鉄骨とCLTという木質パネルを組み合わせた構造体を考えました。この構造体の厚さに合わせて、四周に半透明のポリカーボネイトの採光板を嵌め込んで、光を取り入れています。





施工会社：（株）懸樋工務店



―大変だったことはなんですか？

やはり、前例のないこのスポーツ広場の屋根の構造を実現するのが大変でした。正方形のグリッドを組んでいく鉄骨の接合部や鉄骨とCLTをどう留めるかなどの詳細な検討を、施工の手順なども考慮しながら詰めていく作業には時間がかかりました。鉄と木の組み合わせですから、鉄骨業者と大工さんとの調整も必要で、加工の精度も合わせないとうまくジョイントできません。出来てしまうと苦労の影もなく天井に浮いて見えるこの構造ですが、施工中は、スポーツ広場全体にびっしりと足場が組まれ、ミリ単位での施工精度を実現するために相当な苦労をしています。こうしたチャレンジは、施工者の協力なしでは実現しません。この構造を実現したいという思いを建設会社と共有できたことは、本当に幸せなことだと思います。

―どういう方や組織がどのように関わったプロジェクトなのでしょうか？

このプロジェクトは、鳥取県と日本財団の共同事業の一環で行われた事業で、高齢者や障がい者の生活を民間レベルで支えていく地方創生のモデルとして取り組まれています。具体的には、鳥取県が建設地である県立布勢運動公園内の敷地の提供と計画のサポートを行い、日本財団が建設費の助成、鳥取県障がい者スポーツ協会が建築主及び運営主体となるプロジェクトです。テラスポ鶴舞でも経験していることですが、公共事業と民間事業の中間のような位置づけで、我々のクライアントとしては障がい者スポーツ協会になりますが、3 団体のつなぎ役のような役割を担うことが求められました。設計とは違う意味で、これはなかなか大変でした。しかし、そうした関わりがあったからこそ、この施設がどのような役割を果たしたらいいのかといった、プロジェクトの最初の段階から関わることができたし、建築に対する信頼も得られたのだと思います。

03

「美容 × スポーツ」紙飛行機のようなクラブハウス

ちふれ化粧品飯能研修センター

鮮やかなグリーンに、折り紙のような正方形のクラブハウス。美容とスポーツの架け橋となる、真っ白な紙飛行機がふわり舞い降りた。社員の研修施設として、心地のいいリフレッシュスペースとして、頑張っている女性アスリートのクラブハウスとして、地域の方との共創の場としてこの施設は生まれた。現在はなでしこリーグに加盟する「ちふれASエルフェン埼玉」のクラブハウスとしても利用されている。

Photo : Nobuaki Nakagawa & Kana Tanabe / Text : Kana Tanabe

Interview

ちふれホールディングス株式会社 取締役の
鈴木康之さんにお聞きしました

－この施設で目指したことや特徴はなんですか？

当社の故島田雄二名誉会長が長年抱いていた「社員が皆で集まって会社イベントを開催できる施設をつくりたい」との想いを実現するとともに、「頑張る女性を応援する」という当社の取り組みの象徴となる施設とすることを目指しました。予算は厳守ですのでシビアでしたが、設計についてはプライムさんにお任せしておけば大丈夫、と安心して進めることができました。

－特に気に入っているところや、実際にできてから気づいたことは？

施設のなかで気に入っているところはいろいろありますが、特に、「カフェテリアからのグラウンドの眺め」が好きです。グラウンドについては、人工芝の色が自然な鮮やかさで、女子サッカーチームが利用する施設としてふさわしいと思いました。化粧品会社の研修施設と女子サッカーチームのクラブハウスという複合利用を検討した結果、出入り口が多くなっており、実際に想定どおりで使いやすいのですが、戸締り箇所が多くて大変な面があるようです（笑）。

－予想外のことや想定外の使われ方はありましたか？

カフェテリアについては、計画時においても、女子サッカー選手が練習後に食事を取れるようなスペースとして利用することは想定していたのですが、想定以上にガッツリと食事を作り、食べる状況が発生しています。現在、そうした状況でも対応できるよう改修も検討しています。

－印象に残ったイベントなどはありますか？

社内の恒例行事になっている「島田雄二杯」です。この行事は、当社の川越・飯能勤務者と渋谷勤務者によるサッカー対決を中心に、社員家族も楽しめるバーベキュー等の企画も同時に開催するものですが、研修センターとグラウンドが一体となっているからこそ実施できる、この施設の特徴をしっかりと引き出した行事になっていると自負しています。

－使っている人々の声、感想は？

社内研修でセミナールームを使用している社員からは、「リラックスして集中できる環境」との意見が出ています。女子サッカーの選手もいろいろと感想を言ってくれますが、まとめると、「こんなにセンスが良くて使いやすい施設は他にはないので、感謝の気持ちを持って、大事に利用します！」という感じです。

－施設の今後の役割など、もし何か感じたことがあれば教えてください。

女子サッカー界もプロリーグ化に向け進んでいます。ファン・サポーターや地域の方々などに、今後さらに開放した施設にしていきたいと考えています。

04

PRIME / プライム建築都市研究所展「都市 × 建築 × スポーツ」

プリズミックギャラリー

Photo & Text : Kana Tanabe

プライムは2013年秋、「都市 × 建築 × スポーツ」という展覧会を開催した。展覧会テーマは「スポーツは都市における重要な文化であり、場を生み出すクリエイティブな行為である。現代の都市空間において、スポーツの場について見つめ直すことで新しい建築の可能性がみえてくるのではないだろうか」。プライムが展覧会を通して発信することとは？初日のオープニングパーティの様子をご覧いただきながら、プライムについて探ってゆく。

Exhibition Overview

展示された4つのプロジェクト

2022FIFA ワールドカップ 日本招致次世代型スタジアム コンセプトデザイン

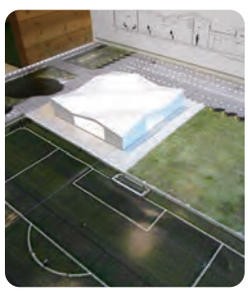
2022FIFAワールドカップ開催国決定の最終プレゼンテーションに向けて提案された8万人収容規模の都市型スタジアム。
所在地：大阪府大阪市
2022FIFAワールドカップ日本招致委員会との共同プロジェクト

日本バスケットボールリーグ 夢のアリーナプロジェクト シブヤモデル

競技者のための体育館から、地域社会のためのアリーナを、スポーツの「聖地」である代々木競技場周辺をモデル地域に想定し「新しいアリーナモデルの考え方」を提案。
所在地：東京都渋谷区
日本バスケットボールリーグ・東京理科大学との共同プロジェクト

渋川シティクラブ構想

群馬県渋川市全域を対象とした「超総合型広域スポーツ文化倶楽部」をめざし、スタート地点として既存の渋川市総合公園を段階を踏みながらクラブ拠点化していく計画。
所在地：群馬県渋川市
群馬大学との共同プロジェクト



ちふれ化粧品 研修施設＋人工芝グラウンド

飯能市で計画中の複合多機能型ニュータウンに新設される工場の次世代型福利厚生施設。企業と社員、工場見学者、地域住民、プレーヤー、観客等、交流や賑わいを生みだすようなゲストハウス。
所在地：埼玉県飯能市

Scene of Exhibition

展覧会の様子

つながる "場" を生み出す

展示を見ていると、なにやら下のフロアから楽しげな声が。おまけに、いい匂いまでしてくる。のぞいてみると、展覧会のオープニングパーティが行われていた。プライムのパーティ好きは本当だったようだ。職業も年代も違う人達同士が、楽しそうに話をしている不思議な時間。でもそれは、きっとプライムが「人を集めて何かをする」ことが好きだからだろう。そして、プライムの周りの人達もプライムの信念に共感を得る部分があるからではないだろうか。

料理を担当したのは北品川の家のTさん

なんと料理を作っているのは北品川の家の建て主でもあるTさんだ。今回の切り盛りを買って出てくれた。相当な量を用意して望んだらしいが、どの料理も完食。30名を予想していた来場者数は総勢70名を超え、建て主や、仕事を共にしてきた懐かしい顔ぶれも集まり、展覧会のオープニングを祝った。

会場内にもワクワクする仕掛けが

会場にも来場者をワクワクさせるような仕掛けがしてある。
入り口に敷かれたグリーンの芝生は「飯能スポーツフィールド」に使用されている人工芝のメーカーのものだそうで、グリーンに引き寄せられた子供たちがゴロンと寝転んで楽しそうに遊ぶ。そしてもうひとつは、プライムの歴代の作品達が年代順に映し出される大型スクリーン。展覧会終了後も流れ続けるスクリーンに人が集まり、パーティ終了後プチ鑑賞会になった。

毎週末には「スポーツナイト」というイベントを開催

展覧会期間中、毎週末には「スポーツナイト」というイベントを開催。Jリーグ佐藤仁司氏をはじめ、日本バスケットボール協会 吉田長寿氏、元サッカー日本代表 加藤久氏と錚々たるメンバーが展覧会場を熱くした。

05

我が家のカタチ、固定概念なし。

天王台の家

Photo : Nobuaki Nakagawa & Kana Tanabe / Text : Kana Tanabe

扇型の敷地形状から実現した独特なフォルム。住宅地の街並みに突如浮遊した、宇宙船のような家。
建物中心には階段があり、家族の関係をゆるりとつなぐ。トビラで締め切った部屋はひとつもなく、
家も、ご家族もすべてオープンな関係性が形づくられていった。

Interview

建て主のOさんご家族にお聞きしました

－プライムに依頼したきっかけは？

妻：雹（ひょう）の被害から家を建て直すことを考え始めました。初めは建築家に頼む予定などもなく、ハウスメーカーを何件も回りました。そんな時、職場で仲の良かった方を通じてプライムと出会いました。

－どんなことを依頼しましたか？

夫：ほぼお任せでしたが、相談したことといえば扇形の地形のことですね。あとは自分たちのライフスタイルをお話ししました。

－家を建てるとき2人ともまだ小学生でしたね。設計に関して何か希望を言いましたか？

息子：希望は言ってないですね。ほぼお任せ状態。
娘：小さかったのであんまり分かってなかったです。

－できてみて、どうでしたか？

息子：友達がよく遊びにきてくれるようになったし、「お前んちすげぇ！」と言われるのは嬉しかったです。
妻：今になって思うのは、家に対して固定概念がなくなったと思います。これはかなりプライムに影響されてますね。
例えば、子供部屋は絶対に必要だと思っていたんだけど、広い個室は必要ないですよって。そしてこのお家、全部が筒抜け状態で、けんかも筒抜け。大きくなったら仕切れば大丈夫ですと言われてたんだけど、結局仕切らなかったですね。逆に個室がなくて良かった。

－自分たちが意図していなかった部分が、暮らしてみて分かったということでしょうか？

妻：そうですね。お家が違っていたら、いまの我が家のスタイルは無かったのかな、とか考えます。自分たちには予想できなかった発想に驚いたのももちろんだけど、我が家のカタチが自分たちが気づかない間にこの家に作られていったというか。建築家というだけではなく、その人の「生き方」みたいなものが設計に表れるんだなと思って感慨深かったですね。

－お気に入りの場所はどこですか？

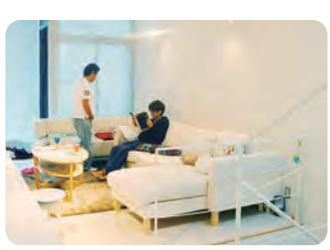
夫：リビングの段差です。この短い階段が最初は違和感だったけど、子供部屋やキッチンと家族が集まるリビングがつながる道のようになっていて結構いいなと。廊下が無いというのもうちの特徴ですね。

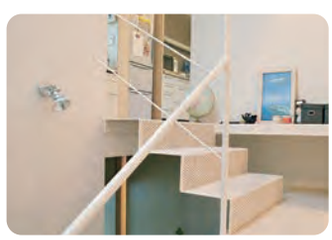
－10年経ってみてどうですか？

夫：メンテナンスがしやすい。今年、外観の塗装やベランダなどいくつか改修工事を行いました。少しずつ手をかけていくことが暮らしの楽しみでもあるんじゃないかな。
息子：とにかく、部屋に引きこもるということをしなかった。自分の部屋がないから引きこもることができなかったんだけど、今思うと良かったんじゃないかな。
娘：私は前の家の記憶があんまりないんですよね。この家と一緒に育ってる感じです（笑）。

－最近、リビングやダイニングで勉強するのが流行っているけど、それが自然に作られていったんですね。

娘：そうかもしれないです。部屋だと集中できないときもあるので、結局、廊下や食卓でやっていたりします。
うちの家が普通だと思っていたら、友達の家に遊びにいったときに色々違っていてびっくりしました。「うちクリエイティブじゃん！」って（笑）。独り部屋があっていいな、って憧れたときもあったけど、なくてもいいかもって思えました。



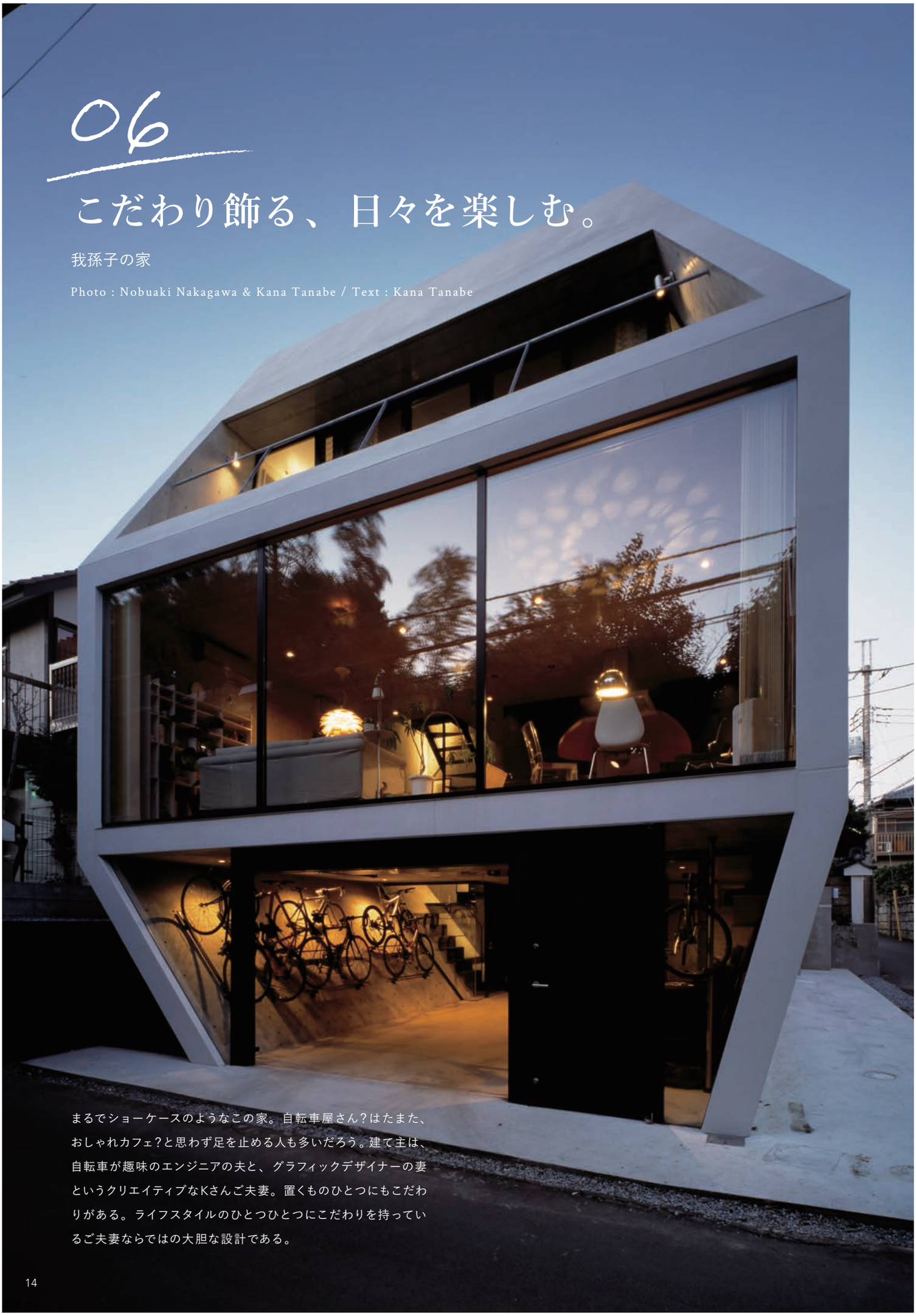


06

こだわり飾る、日々を楽しむ。

我孫子の家

Photo : Nobuaki Nakagawa & Kana Tanabe / Text : Kana Tanabe



まるでショーケースのようなこの家。自転車屋さん？はたまた、おしゃれカフェ？と思わず足を止める人も多いだろう。建て主は、自転車が趣味のエンジニアの夫と、グラフィックデザイナーの妻というクリエイティブなKさんご夫妻。置くもののひとつにもこだわりがある。ライフスタイルのひとつひとつにこだわりを持っているご夫妻ならではの大胆な設計である。

Interview

建て主のＫさんにお聞きしました

－プライムに依頼したきっかけは？

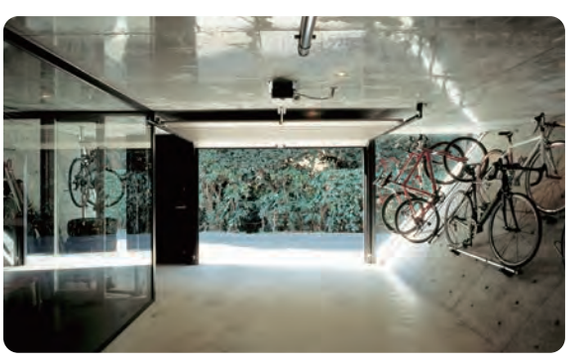
雑誌で天王台の家を見てプライムを知りました。家も近所なので見てみたいと電話をしたら、個人情報なので教える事はできませんと断られて。
一度事務所にいらしてくださいと言われました。気づいたら自分たちの家、建てていましたよ（笑）。

－どんなことを依頼しましたか？

海外から買い付けてきた家具達に負けないような建築をお願いしますと依頼しました。ハウスメーカーも何度か訪れたんですけど、なかなか自分たちのこだわりをわかってもらえないんですよ。そんなの付けたらカッコ悪いじゃん！みたいな、信じられないようなことを普通にやるんだもの。こちらはカッコイイ家建てたいじゃないですか。なんか根本的に違っているっていうか、かなりもどかしかったですね。プライムと仕事しているときはそういうことが一度もなかったな。

－住み心地はどうですか？

コンクリートに包まれているので冬はかなり冷えるけど、寒さは慣れますよ（笑）。暮らしやすさって、実用性がすべてじゃないと思うんですよ。カッコよさとか、生活を楽しめるとか、そういうことも含めてのことだと思います。



－自転車のガレージが特徴的ですよね。

そうですね。１階部分は半地下になっているんです。地形の条件に合わせて地下部分を掘り下げて、主人の趣味の自転車用ガレージと作業場になっています。地下へと続く階段は、秘密基地に向かう時のワクワク感をイメージして作ったんですって。子供達が生まれてからは、打ち合わせ場所としても使ってます。

－お気に入りの場所はどこですか？

それぞれありますね。私はソファーが好き。主人は何度もショップを見て惚れ込んだエッグチェアの上でしょうね。
子供達はどこだろう…
（子供達）「ぜんぶ！」
あらー、建築家がそんなこと聞いたら嬉しくて泣いちゃうね。

－子供部屋はないんですか？

はい。設計段階から子供部屋のことは考えていなかったです。子供と一緒に過ごす時間って一生のうちの何年かでしょ。また２人の生活にもどる。だから、ふたりの暮らしを中心に考えました。たくさん部屋を作らなくても、なんとかなっていますよ。

07

「木 × 巨大ガラス」
究極のコラボレーションの家

東松戸の家

Photo : Nobuaki Nakagawa & Kana Tanabe / Text : Kana Tanabe

レトロで珍しい列車が走る、のどかな風景。眺めていると、線路に面して建つこの建物に思わず目がとまる。
「あれは何だ！？」住宅の中をぐるぐる歩くと、ガラスと木材のストライプの家が現れる。どちらも扱いが難しい素材。
ご主人が建材メーカーで働いていることから実現した究極のコラボレーションの家。

Interview

建て主のSさんご夫妻にお聞きしました

－プライムに依頼したきっかけは？

妻：イメージは平屋なんですよ。雑誌で前橋の家を見てプライムにお願いしたいと思ったのがきっかけです。でも家が建つ前に土地だけを見たときは正直「小さいな」って思っていたんですよね。ところが、家が建ったら広くなったように感じたんですよ。すごく不思議で、魔法みたいだなぁと思ってびっくりしました。

－どんなことを依頼しましたか？

妻：なにより、ふたりとも家具が大好きで、持っている家具を生かしたいと思っていたんです。「こだわりの家具に囲まれて暮らすなんて、いいなぁ」と思って。プライムにお願いしました。そうしたら、担当の方が家具を含めた図面と模型を作ってくれたんですよ。びっくりしましたね。電話の位置まで決めますよって言ってくれて。私たちのこだわりをそこまで考えてくれるのか、と驚きの連続でした。

－木材が使われているのに、「ログハウス」のようなごつさが無いというか、スマートですよね。

夫：そうですね。木材の壁も、間にガラスを使うことで重々しさを感じさせないし、閉鎖的な感じがしないでしょ。これこそ、まさに「素材の極限に挑戦した家」でしょうね（笑）。

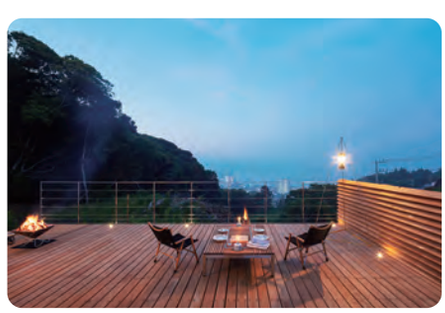
－ご主人はバンド活動をされているのですよね？

夫：はい。今、僕が活動しているバンド「FROITO」の新曲をレコーディング中なんですけど、この家でPVを撮影したいなと思って話を進めているところなんです。バンドのPVに家が出てくるってのも、なかなか面白いでしょ？

Related Projects

yliad ［イリアード］

2018年、Sさんご夫妻は鴨川市に宿泊施設「yliad」をオープンし、運営を開始した（PRIME設計）。完全プライベート貸別荘で、観光・海遊び・サーフィンの拠点として、夜はウッドデッキで星や海岸のイルミネーションを見ながら、BBQなども楽しむことができる。Sさんの描く、暮らしのこだわりへの追求、挑戦が今後も楽しみだ。https://yliad.jp



08

「注文の多い料理家」の家

北品川の家

Photo : Nobuaki Nakagawa & Kana Tanabe / Text : Kana Tanabe

依頼内容は、自宅で料理教室をすること、シーズンごとに飾り付けをすること、ホームパーティ用の膨大なパーティグッズを収納すること…など「注文の多い料理家」の家。キッチンスペースを広く取り、参加者全員が思いっきりパーティを楽しめるつくりになっている。縦に細長く、狭く見える敷地だったが、細長いハコを縦に積み上げるというアイデアでうまく利用。一見、ビルのような作り。ワンフロア1住戸を縦に積み重ねたことで、家族同士の距離の取り方や不公平感のないスペース配分となっている。1階がエントランス、2・3階がTさんご夫妻それぞれの親世帯、4・5階がTさんご夫妻が住んでいる。各フロアにLDKがあり、普段はエレベーターで移動するため、互いのライフスタイルに左右されずに生活ができる。

Interview

建て主のTさんにお聞きしました

－プライムに依頼したきっかけは？

新宿のOZONEに依頼をして、建築家コンペで決めました。3グループがプレゼンをして、それぞれの案や図面を見てこちらが決めるというものです。とはいえ、人を呼びたいし、私の仕事場でもあるうちのライフスタイルを図面だけで決めてしまうのは嫌だったんです。だからまずは、3グループを家にお招きして、パーティをしました。まずはご飯を食べてもらって、楽しんでもらって、うちのライフスタイルを分かってもらいたいと思いました。家族でひそひそ集まって、「誰の案がいい？」って聞いたら、満場一致でプライムでした。価値観も含めて、私たちの希望をうまく考えてくれたのがプライムじゃないかな。プライムも何回もうちのパーティにいらしているんですよ。今思うと、プライム自身が楽しみたかったんじゃん！っていうね（笑）。家作りって信頼関係だと思うんです。家に何かあったときすぐに相談できること、長くお付き合いできることも大きなポイントですね。

－テレビ番組「おもいッきりDON！」にも取材されたとか？

はい。録画見ますか？「ホームパーティ啓蒙家の家」として紹介されました。ミッツ・マングローブさんと益若つばさちゃんと、ここで一緒にプチ料理教室もやったんですよ。

－料理教室では、自宅でホームパーティをすることを教えられているんですよね。

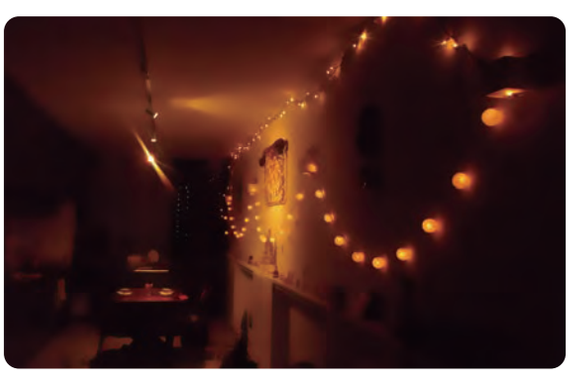
はい。見知らぬ人どうしが、料理をひとつのきっかけにしてつながっていくことが私にとってはパーティなんです。それを自宅でできたら楽しいじゃないですか。どんなに小さなパーティでも何かひとつテーマを決めることがポイント。今日は釣り師のお友達が釣ってきてくれた大きな鯛でパーティです。お刺身、かぶと煮、炙り焼き、あら汁…今日は鯛のフルコースですよ！

－外国製のものをあまり使わないのですね。

私はハードユーザーなので、器材は全て既存の日本製のものを使っています。使い勝手もありますが、料理教室で習ったことを生徒さん達が家で再現できることも、とても重要なことなのですよ。ホームパーティをやるときに、シンクがテーブル代わりになるようにとか、細かい指示をしたかったので、キッチンの図面は私が描いちゃいました。

－壁がにぎやかで楽しい雰囲気ですね。

オールシーズン大丈夫っていうシンプルな建築も好きですが、四季を感じなくなってしまう。壁は好きなだけ飾り付けられるよう、真っ白でお願いしますと依頼しました。毎シーズン、季節のしつらえを楽しんでいます。



PRIME MEDIA LINE

発行：株式会社 プライム建築都市研究所
企画・編集・デザイン：OTOSO inc.
発行日：2020年10月1日（No.22）

お問合せ：株式会社 プライム建築都市研究所
〒171-0033 東京都豊島区高田3-36-12 衛材ビル2F
Tel：03-6907-0991　Mail：info@prime-lab.com

PRIME
prime-lab.com